

図書館職員となって

小田美穂

私の住む杵築市は、海と川と山の、豊かな自然に抱かれた、美しい城下町です。

静かなたたずまいの町並みは、昔といくらかは様変わりしたものの、武家屋敷の古びた土塀を背景に、石畳の続く坂道で、おけいこ帰りの若い娘さんと出会うとき、心もなごみ、この町に住む幸せを感じます。

振り返ると、若いころ私は、まるで眠っているようなこの町が嫌いでした。都会へのあこがれが強くて、郷里を離れることのみ、願ったものです。

でも、人生の半ばを過ぎたいま、改めて、我が町のよさを見直しています。

話は変わりますが、図書館では、より多くの人々に、またより多く図書館の利用をと、常に心掛けています。

本の返却の際、読書感を聞くこともしばしばですが、感動をたたえた、生き生きした表情を目のあたりにすると、喜び深いものがあります。

「リクエスト」や「レファレンス」によって、獲得する新しい知識、図書館は新しい知識の宝庫です。扉を開くと、知的な旅が始まります。

でも、私の勘違いや、資料不足のために、十分な対応が出来なくて、ときにお叱りや注意を受けることもあります。まずまず、利用者の方々から、喜んでいただけるのは、司書冥利につきるものと思います。

職場は、毎日が、本と人との新しい出会いを約束してくれます。オーバーな表現かもしれませんが、天職と思うようになりました。

かつて、かずかずの文人・学者を輩出したふるさと…、その武家屋敷の坂道で、また漁網をつくらう浜で、ミカン畑の山道など、町のあちこちで、オレンジ色の、図書館専用手提袋を持つ人たちの姿が見られる日を、私は夢見るのです。

振り返れば平成元年四月、教育委員会へ出向の命を受け、市立図書館兼民俗資料館勤務の、辞令を受け取ったときは驚きでした。

市職員として二十年あまり勤務、その当時税務課に所属していた私は、五月の決算期をひかえて、残業の続く日を送っていました。そこへ出向の発令です。意外でした。

「本好きの貴女には、いい職場じゃないの。」

「ときには、外局の空気を吸うのもいいわ。また、本庁へ帰ってくるわよ。」

といたわりこもる、仲間の声…。しかし、市長部局から外局への出向は、ともすれば「主流はずれ」と見られ、ときには左遷的な人事だとの声も聞いていましたので、ショックでした。

ともあれ、確かに私は、本が好きでした。子どものころから、いつも本を手にしていましたし、学生時代は図書室へ入りびたりでした。

でも市職員になってからは、必要な書物は購入するので、ただの一度も市立図書館（公民館図書

室)を利用したことはありませんでした。

市立図書館は、杵築中学校に隣接し、民俗資料館との併設で建てられています。一階が事務室と資料館で、図書館は二階にあります。閲覧室の席数は四十あまり、蔵書は、旧梅園文庫と中央公民館図書室のものを受け継いでいるため、貴重な和綴りの古書がある反面、背文字の見づらいものなどが多く、新刊書の少いのが目立ちます。

事務引継ぎのとき、前任者の男子職員から、本の装備の仕方として、ブックコートの掛け方を教わりましたが、やってみると、空気が入ってしまい、不手際そのものです。これから先、毎日こうした手内職のような仕事をするのかと思うと、未知の世界に迷いこんだ失望感が生れました。

分類事務は、

「NDCを参考にして、貴女のいいように、わかる範囲ですといい。」

とのこと、とにかく戸惑うことばかりでした。でも、仕事には専念すべきです。

そこでそれからは毎日、書架の間を歩き回っては、気づいたことをメモにしました。そうすると、やらねばならないことが、次から次へと見えてくるのです。

それとわかれると、じっとしておれない性格の私は、他市の図書館は、どんな図書館なんだろう、どんなことをしているのかと、気になりはじめました。

仕事は、まず知ることに始まります。社会教育施設の中で、最も専門的な施設としての図書館を、施設設備・機能・業務など、各分野からアプローチを考えました。

手始めに、日曜日は県立図書館をはじめ、中津・日田・別府・安心院など、県内各地の図書館巡りに終始しました。

近代的な施設を誇り、専門職員を配置した、恵まれた図書館…、課題をかかえる館…、自治体の取組みによる違いなどを感じつつ、なお目に止めるものも数多く、すべてが参考になりました。

そこで私は、次の措置に取り組むことにしました。

- (1) 閉架書庫の郷土資料の一部を、開架用として整備し、貸し出しの出来る「郷土資料コーナー」を設けること。
- (2) 閲覧室窓下のスペースを活用して、棚をとりつけ、絵本書架のコーナーもつくる。
- (3) 幼児のために、カーペットを敷いて、狭いながらも、児童室コーナーを設置し、幼児用のテーブルなどを購入する。

ただちに手がけたこうした措置は、まさしく、県下の図書館巡りから生まれたものでした。利用者のみなさんが、この変化には敏感に反応し、

「図書館が変わった。利用しやすくなった。」

「幼児も楽しめる図書館になった。」

と、喜んでくれました。

子供やお母さんの笑顔に向い合うと、小さな満足感が生まれます。そして、ともに感じる喜びが、利用者との連帯感をもたらし、さらに創造的な経営プランを生む、エネルギーへと転化して行くから不思議です。

幸いなことに、上司も私の仕事に理解を示してくれましたから、気になる未処理のあれこれを、残業して片付けました。

春…四月になると、ピカピカの一年生が、お母さんと一緒にやって来ます。

「どんな本を読ませたらいいのでしょうか。なにか、いい本はありませんか。」

お母さんの真面目な悩みを聞き、また相談を受けます。

お母さんの要求に応えるには、児童文学についても、専門的な造詣が必要です。さらに子供の発達にふさわしい読書指導が求められます。

私は、こうした現実を解決するため、まず絵本をはじめ、子供の本をできるだけ多く、読むことにしました。

「おばちゃん、この前、貸してくれた本、すごくおもしろかったよ。おばあちゃんにも、読んであげたんで。」

と、そんな言葉を聞くと、一日中、柔らかな優しい気持ちで過ごせます。

いつも必ず、同じ絵本を借りていくのは、三歳のゆかちゃんです。

「今日は、もう違う本にしましょうね。」

と、お母さんが言うのですが、

「いや。この本にする。」

と言うと、しっかり胸に抱いて帰ります。その本はマーガレット・ウィズ・ブラウン作、ガス・ウィリアムズ絵の『まんげつよるまでまちなさい』です。

子供は、お気に入りの本は、それこそ何度でも借りてゆきます。

ゆかちゃんは、うちの図書館で、こんなにも気に入った本に出会えたのです。そんな子供を見ると私は、心が震えて思わず涙が出てきそうになります。そして子供に手渡す、一冊の本の責任と重みを感じると共に、この仕事に携わることの幸せをしみじみ感じます。

ある日のことでした。

「おばちゃん、ほら、お月さまがいま起きてきたよ。」

と言う、女の子の指さす方を見れば、真昼の空に大きなお月さま。

「お昼寝していて、やっと目が覚めたのかな。」

と言うと、

「ゆうこね、お月さま大好き。きれいでしょ。そして、とてもやさしいの。」

と言います。

どこからこんな言葉が浮かぶのでしょうか。子供の言葉は宝石のようです。子供と出会う毎日は、いつも驚きと感激の連続です。

この仕事が、長くなるほど、やりきれない思いをすることもしばしばです。ともすれば打ちのめされ、落ち込んでしまうとき、図書館で出会う子供達が、私の心の、大きな支えであり、明日への活力源となっているのは確かです。

(おだ みほ 杵築市立図書館)